能狂言道しるべ

監修 観世清和

文・児玉信
写真・森田拾史郎

孔雀ブックス

前橋市立図書館
☎(027)224-4311
0115233074

●カバーデザイン●
斉藤　續　白岩登三靖

●本文レイアウト●
白岩登三靖

●インタビュー●
渡辺紀子

●校正●
萩原豊彦

●編集●
前島綾子

●主たる参考資料●
『講座 能・狂言』(岩波書店)
『完訳日本の古典 謡曲集』(小学館)
『新潮日本古典集成 謡曲集』(新潮社)
『日本の伝統芸能 能と狂言』(小峰書店)
『CD版 観世流声の百番集』(筑摩書房)
『写真で見る能の扮装』(わんや書店) ほか

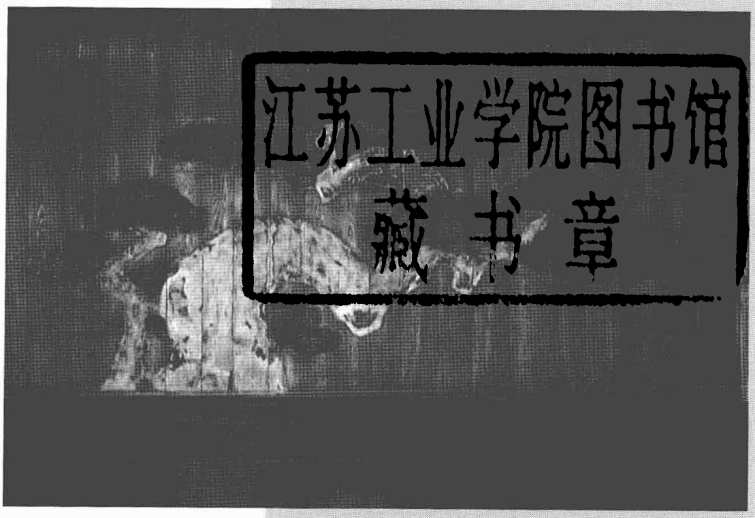
孔雀ブックス

能(のう) 狂言(きょうげん) 道(みち)しるべ

著者　児玉信(こだままこと)　森田拾史郎(もりたとしろう)
発行者　真尾　栄
発行所　主婦と生活社
〒104東京都中央区京橋3-5-7
電話　編集03-3563-5135
　　販売03-3563-5121
　　振替00100-0-36364
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社明泉堂
Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製することは、
著作権法上での例外を除き、禁じられています。
本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター
(03-3401-2382) にご連絡ください。
©M.kodama T.morita 1997 Printed in Japan

ISBN4-391-12032-1C0076

能狂言道しるべ

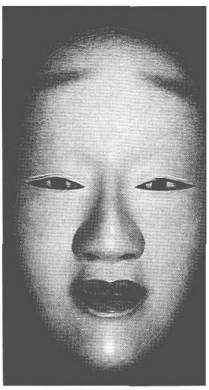


江苏工业学院图书馆
藏书章

文 児玉 信
写真 森田拾史郎

能

目次



巻頭エッセイ
澄んだ世界を表現したい——観世清和　4

能　狂言道しるべ——6
花のいろいろ／能舞台／役者／「松風」に学ぶ

カラーグラビア・炎　Fantasy——17

屋島　やしま　18
羽衣　はごろも　19
三山　みつやま　20
鵜羽　うのは　21
船弁慶　ふなべんけい　22
道成寺　どうじょうじ　24
杜若　かきつばた　25
佐渡狐　さどぎつね　26
土蜘蛛　つちぐも　28
猩々乱　しょうじょうみだれ　28
望月　もちづき　29
毘沙門　びしゃもん　30
葵上　あおいのうえ　31
菊慈童　きくじどう　32
通盛　みちもり　33
老椿　おいつばき　34
巴　ともえ　35
砧　きぬた　36
天鼓　てんこ　37
半蔀　はしとみ　38
女と影　おんなとかげ　39
松風　まつかぜ　40
熊野　ゆや　41
藤　ふじ　42
月見座頭　つきみざとう　43
鶴　つる　44
羽衣　はごろも　45
野宮　ののみや　46
安達原　あだちがはら　47
隅田川　すみだがわ　48
隅田川　すみだがわ　49
安達原　あだちがはら　50
卒都婆小町　そとばこまち　51
山姥　やまんば　52
渇水龍女　かっすいりゅうにょ　53
現在七面　げんざいしちめん　54
高砂　たかさご　55
屋島　やしま　56
大般若　だいはんにゃ　57
土蜘蛛　つちぐも　58
鍾馗　しょうき　59
加茂物狂　かもものぐるい　60
かぐや姫　かぐやひめ　60
鎌腹　かまばら　61
伯母ケ酒　おばがさけ　62
絵馬　えま　62
紅葉狩　もみじがり　63
翁　おきな　64
石橋　しゃっきょう　64

能・狂言に親しむ——65

エッセイ・脳の中の劇場—私の能の愉しみ方——多田富雄　66
エッセイ・能、この未知との遭遇——林望　68

翁　おきな　70
鞍馬天狗　くらまてんぐ　72
道成寺　どうじょうじ　74
隅田川　すみだがわ　76
石橋　しゃっきょう　78
鵜飼　うかい　80

杜若　かきつばた　82
土蜘蛛　つちぐも　89
雷電　らいでん　86
井筒　いづつ　88
安達原　あだちがはら　90
融　とおる　92
紅葉狩　もみじがり　94
葛城　かづらき　96
鉢木　はちのき　98
船弁慶　ふなべんけい　100
和布刈　めかり　102

インタビュー・エッセイ——104
森常好・技術を超えたところに能がある——104
一噌幸弘・クライマックスの舞の部分は打楽器的奏法で緩急自在——105
大倉源次郎・異文化との出合い「羽衣」と「E.T.」——106
大倉正之助・能は生命賛歌、大鼓は命のほとばしり——107
観世元伯・情景が出てくるような囃子のハーモニーでありたい——108
野村萬斎・狂言はヒューマン・コメディ、ライブ感を重視したい——109

狂言

庵の梅　いおりのうめ　110
靱猿　うつぼざる　112
花盗人　はなぬすびと　113
蚊相撲　かずもう　114
蝸牛　かぎゅう　115
釣狐　つりぎつね　116
鳴子　なるこ　118
狐塚　きつねづか　118
節分　せつぶん　119
福の神　ふくのかみ　120

能　狂言を支える人々—インタビュー・エッセイ——121
谷口明子・能面は能のいのち、表情の豊かさが魅力です——122
堂本朋子・揚幕の五色が能装束の色の基本です——124
檜書店・謡本の歴史を語る版木と屋根瓦——124
薪能(野外能)選・主な能楽堂——主婦と生活社編集部編——126

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

澄んだ世界を表現したい

観世清和

——26世観世宗家

最近は、薪能（たきぎのう）と呼ばれる催しが大変増えました。薪能で初めて能をご覧になったという方も多いのではないでしょうか。

薪能は屋外で多くの方にご覧頂くものですから、出来るだけそれにふさわしい曲を選んだり、装束を用意するなど、演ずる側には常の舞台とは違った工夫も必要になります。風が吹けば思いがけず袖が翻ることもありますが、爽やかな葉擦れの音を耳にしながらの演能には、また違った趣があって、演者としてもどこかわくわくするようなところがあります。

何千人という大きな会場となりますと、客席の後ろの方ではお弁当を広げていらっしゃる方もあり、それも能楽堂にはない薪能の楽しさの一つかもしれません。気軽に薪能を見物されて、それが一つのきっかけとなって、能に興味を持って頂ければ大変嬉しく思います。

能は理屈で見るものではありません。音楽の一ジャンルと思って頂いても結構ですし、古典演劇というとらえ方でも構いません。もし能がお好きでしたら、まず見にいらして下さい。忌憚（きたん）のないご批評を頂きたいと思います。

能は洗練を重ねる中で、内に非常に深いものを秘めるようになりました。室町時代に大成して以来今日まで、ひと時も絶えることなく受け継がれてきたのも、その奥行きの深さ故ではないでしょうか。実際演じておりましても、一度やって出来たからそれでいいということは決してありません。演じる度に新しい疑問が湧き、新しい発見があります。こうすればよかったという思いは尽きることがなく、そこにこそ能の素晴しさ、魅力があるのではないかと思っています。

ただそうだからといって、能はいわゆる通だけが分かるものであり、分からない人には分からなくていいと考えるのは間違っていると思います。広く能を理解して頂けるように努力することは、演ずる者の務めです。そのために例えば、催しのない時でも能楽堂を開

放してお客様に接して頂いたり、また能のことを知りたいと思った方が、自由にビデオを見たりテープを聞いたり出来るような場所がぜひ欲しいと思っています。

最近私は、上演が途絶えていた曲の復曲にも取り組んでいますが、復曲はたいへん勉強になります。

普段私たちが能を演じるとき、型付という昔から伝えられてきた演出に従うのですが、ついそれに頼りがちになることがあります。一つ一つの演技がなぜそうなっているのか、そのことにあまり注意を払わず、惰性で演じてしまう危険があるのです。ところが復曲という作業では、演技の一つ一つについて細かい確認が必要となります。ですから、どうしてそのような型になったのかを、常に考えなければなりません。

仕舞「熊坂」

例えば最近の復曲の一つに、「松浦佐用姫」という曲がありました。船出して去っていく恋人の姿を追って領巾振山にかけ登った姫が、白絹を振って別れを悲しむ場面がクライマックスになります。その場面は、白絹を扇に代えて演じても能としては成り立ちます。むしろ、表現を洗練させながら演技の贅肉を落としてきた能の歩みから考えれば、ここは扇を使うほうが自然かもしれません。しかし、白絹を大きく振るからこそ情感は増すともいえ、実際私は舞台で白絹を振りながら、いつになく切なさが募るのを覚えたものです。

もともと能の型には厳しいきまりがあり、繰り返しそれを学びます。どの曲のどの場面をとりクエストされれば、シテもワキも地謡もお囃子方も、さっと合わせることができます。それほど約束事がきちんとしている世界です。しかし、その約束が形骸化せずに伝えられているのは、なぜそのような型なのかという問いが演じる者に常にあるからではないでしょうか。私はその問いかけをいつも忘れずにいたいと思っています。

そして、なにより私が能役者として心掛けていることは、日々折り目を正しく過ごし、ものごとに澄んだ心で接したいということです。清らかに澄むせせらぎの音がかすかに聞こえるような、そんな世界が能の中に表現できたら、というのが私の願いです。

能　狂言道しるべ

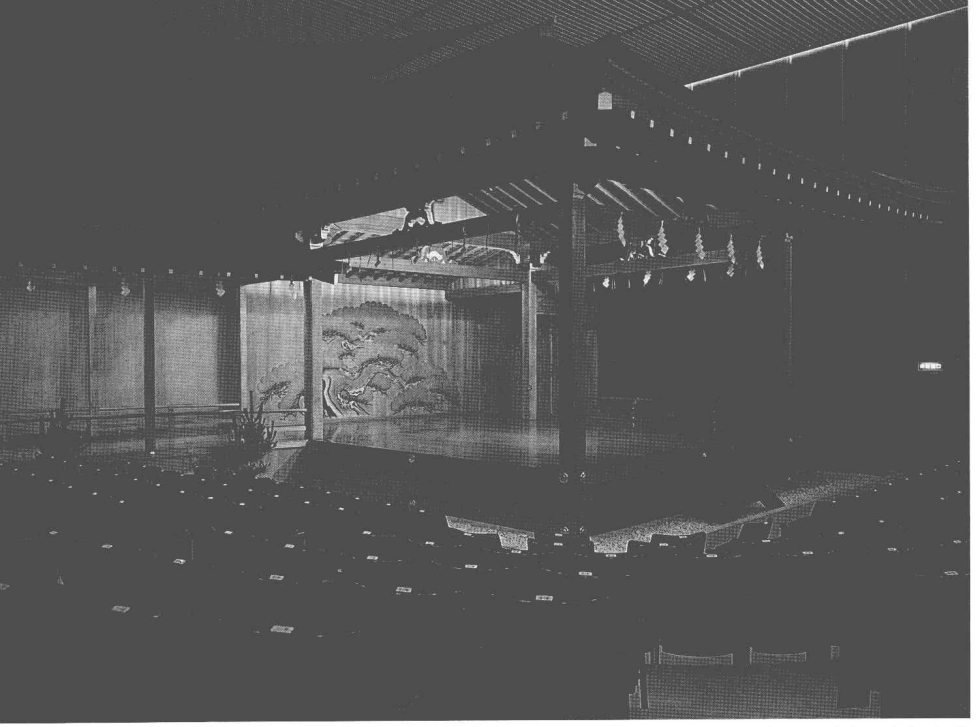
児玉　信

能は、歌と舞と詞（ことば）とが溶け合って一つになった、音楽劇です。能面とよばれる独特の面を使う、仮面劇でもあります。しみじみと心に沁（し）みる、深い味わいを持っていますが、室町時代（一三三八―一五七三）のはじめに、大和――現在の奈良地方を本拠にして能の一座を率い活動していた観阿弥（かんあみ）・世阿弥（ぜあみ）という天才父子が、大成しました。

平安時代を代表する貴族文化を受け継いで新しく生まれたのが、鎌倉時代の武家文化です。室町時代は、鎌倉時代に発展した武家文化に、物事の正しい筋道を重んじる、当時の社会に深く浸透していた禅宗の思想などを取り入れて、さらに新しい文化を生み出しました。武家や公家といった特権階級ばかりでなく、職人や商人たち大衆も、この室町文化を支えて大きな役割を果たします。人気役者であり、興行主であり、劇作家、作曲家、演出家としても才能にあふれていた観阿弥・世阿弥は、こうした時代の風潮を敏感にとらえ、同時代に流行していたほかの歌舞芸能やその演奏者たちの長所を学んで、能が、今日なお美しく咲き誇る、大輪の花に育つ種を蒔いたのです。

花のいろいろ――能の五番立　神・男・女・狂・鬼

観阿弥・世阿弥が種を蒔き大きく育てた能という花は、その後も役者をはじめ多くの庇護者たちの手で丹精され、今日まで三〇〇〇番に近いと推定されている膨大な作品を、次々に生んで来ました。そのほとんどは埋もれて現在上演可能な作品として伝承されているのは、二五〇番ほど。明治以降に作られた、いわゆる新作能も含まれていますが、大体は古作の能です。観阿弥・世阿弥の作品はもちろん、それ以前の作者の作品も残っています。これら伝承されている二五〇番には、室町という時代の面影が色濃く漂っており、時代



14 世喜多六平太記念能楽堂

を越えたテーマの普遍性によって、長い命脈を保っていると考えていいでしょう。

ところで能は、非常に様式性の高い芸能といわれます。これ以上手の加えようがないと思われるほど隅々まで行き届く様式が、一応の完成をみたのは、江戸時代の中ごろと考えられています。江戸幕府は、能を儀式用の芸能として重用しました。役者たちは保護を受ける代わり、日々技芸を怠らぬようなど、生活の全般にわたって細かく規制されました。こうした中で、様式性も高まったというわけです。先ほど上演可能として挙げた二五〇番の演目も、多少の移り変わりはありますが、江戸時代にほぼ固まりました。

その二五〇番の演目を、主役の性格やテーマによって分類したのが、俗にいう「神」「男」「女」「狂」「鬼」です。まず『翁』から話をすすめます。

翁

能の役者にとって精神的支柱ともいうべき、神聖この上ない神の出現するのが『翁』です。演者は、上演当日に向け斎戒沐浴し、当日には鏡の間に翁飾りという祭壇をしつらえて、白、黒二つの尉面と鈴を納めた面箱を祀り、神酒、塩を口に含んで舞台に登場するといったように、とりわけ大切に扱います。

江戸幕府は、この祝祭劇を一日の初めに据え、以下、神、男、女、狂、鬼の順に五番の能を演じる番組を正式のものとしました。『翁』付き五番立で、式能とよび

ます。現在では毎年二月に、能楽師の団体である社団法人能楽協会が催して、江戸幕府ゆかりの行事の遺風を伝えています。ちなみに式能は、能と能との間に狂言が演じられ、全体は長時間にわたるので、めったに催されません。しかし、今日では主流になっている、能一番と狂言一番、あるいは能二番と狂言一番といった番組の編成も、実は式能の五番立を基本にして作ります。以下五番立を順を追って。

神

『翁』と同様に、人々に喜びをもたらす神々の登場するのが神の能。『翁』に準じる神格を持ち、脇能とよばれています。式能の五番立番組の最初の演目という意味で、一番目物とよんだりもします。神話や民俗信仰などに題材をとり、神の奇瑞を描くといった内容のものが多いのですが、幸いになりたいという、私たちの祖先の素朴な感情が、舞台の上に神が姿を現して人々を祝福するこうした能を創らせたと考えてよいと思います。代表的な脇能が『高砂』です。播磨の国高砂の浦で松の落葉を掃き清め、常に緑なす松のめでたさを讃えて夫婦和合の尊さを説いた老夫婦は、実は住吉と高砂の相生の松の化身だった。やがて住吉の神が若々しい男神の姿で現れて爽やかに力強く神舞を舞い、ひるがえす袖で悪魔を払って去って行く――こんな筋になっています。

仙人の桃を食べて九千年の齢を授けられたという東方朔がいかめしい老体の男神姿で現れ、おごそかに舞楽を舞う『東方朔』、天照大神・天鈿女命、手力雄命が現れて、天の岩戸開きの神話を再現する『絵馬』などいろいろな脇能がありますが、いずれの作品にも、人々に寿福を与えるという祝言の気持ちが一貫して流れています。

男

源義経や平敦盛、平忠度たち源平の武者を主人公とし、「平家物語」などに記されたエピソードを内容に盛り込んだのが、男の能です。式能では脇能に次いで演じられるので、二番目物といいます。

仏教では、武者たちの霊魂は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道のうち修羅道に転生し、戦いに明け暮れた生前の報いで苦しむと考えられました。二番目物は、この世に執心を残した武者が、ほんの一時現世に戻って過去を回想し、また修羅道に帰って行くという構成をとるので、修羅能ともよびます。屋島に陣を張った平家を奇襲戦で破り、ついに壇ノ浦で滅ぼしたと語る義経の霊が、空しさを漂わせて夜明けとともに消えて行く『屋島』。播磨一ノ谷の合戦で討死した平通盛と、その死を悲しんで入水した妻の小宰相の霊が、戦いのために夫婦引き裂かれた嘆きを訴える『通盛』。世阿弥は修羅の能について、源平などの名ある武将のエピソードを、風雅な趣を織りまぜて作れば面白さが引き立つと述べました。

その修羅能で、異色が目立つ二つの作品があります。一つは『田村』です。主人公の坂上田村麻呂は源平の武将ではありませんし、清水観音の加護で鈴鹿山の鬼神を退治した様子を誇らしげに語り、修羅で苦しむ姿をみせないのが変わっています。もう一つは『巴』で、主人公は女武者です。美女の世評高く、一騎当千の武勇でも知られた巴御前の霊が、長い黒髪を振り乱し、顔を血に染めて奮戦した様や、愛する木曾義仲の非業の最期を見届けた悲しみを語って消えて行きます。

なお、修羅能だけではありませんが、『屋島』『通盛』『巴』のように、心残りある死者の霊が、戦場その他、故人ゆかりの地を訪れた旅僧など現世の人間の前に、里の老人あるいは里女といった仮の姿で現れて、弔ってほしいと頼み、それとなく本人であることをほのめかして消えると、やがて在りし日の姿で現れて昔を回想する…という、過去と現在とを行ったり来たりするような構成の能を、夢幻能とよんでいます。世阿弥が完成した様式です。

女

りりしい甲冑姿で風雅な、あるいは憂いに満ちた昔を回想した武者が、太刀を抜き払い、戦場にもどるように修羅の世界へ消え去ったあとは、女性を主人公とする能の出番です。

「伊勢物語」の紀有常女、「源氏物語」の六条御息所や夕顔、「平家物語」の熊野や祇王・祇女といった若く気高い女人たちが、在原業平・光源氏・平宗盛・平清盛たち雅男の気まぐれに一喜一憂した昔を振り返り、愛の行方を美しい舞に託して語ると儚なく消えて行くという筋の『井筒』『野宮』『半蔀』『熊野』『仏原』。天女が美しく舞って地上に宝を降らす『羽衣』。動植物の精が女の姿で現れて夢のように舞う『胡蝶』『藤』『芭蕉』『杜若』。西行法師や藤原定家と和歌を交わした遊女や式子内親王を主人公とする『江口』『定家』。山中に捨てられた老婆が淡々と運命を語る『姨捨』。名高かった白拍子の霊が老女の姿で現れて仏縁を乞う『桧垣』。老いの身にかつての色香を漂わせて小野小町が舞う『関寺小町』。

女の能もさまざまですが、世阿弥は能の本質は舞と歌の二点にあるとし、女性を主人公とする能が最も本質を表しやすいと述べました。〝老女物〟とよばれ重く扱われる『姨捨』『桧垣』『関寺小町』の物静かで落ち着いた境地を頂点として、最も能らしい能と受け止められているのが女の能です。能は本来男性が演じ育てて来ており、女能の際は必ず仮髪を用いたので鬘能(鬘物)ともいいます。式能では修羅能に次いで演じるため、三番目物といったりもします。

ただ、三番目物というとき注意しなければならないのは、桜の古木の精が老翁の姿で西行法師の夢の中に現れて舞を舞う『西行桜』や、壮年の業平の霊が姿を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現す『雲林院』といった能も、三番目物に加える場合があることです。つまり舞を中心とする情緒的な風趣を持つ能を、三番目物と考えるわけです。

狂

行方知れずになった我が子を思うあまり狂乱しさ迷う母。『隅田川』『百万』『三井寺』『桜川』は、こうした狂女を主人公とするので狂女物とよびます。一時的に正気を失った女性の狂いの様子を、美しく品よく見せることに主眼が置かれています。式能では鬘物の後に演じられるので、四番目物ともよびます。雅びな舞で鮮やかな存在感を示し、余韻嫋々たる風情を残して消える鬘物の女たちとは、いく分違った雰囲気をたたえるのが狂女物です。

ところで、四番目物の能は狂女物でまとめられるほど単純ではありません。さまざまな作品を集めてあるという意味で、ここに所属する能を総括して雑能とよぶほどです。個々の作品のテーマや構成には違いはあっても、作品を流れる情調には、何となく似通う点がある作品をここに収めて四番目物としたと受け取ってよいと思います。

恋人の形見を抱き、再会を信じて跡を追う女の能『花筐』『班女』。天香具山に住む男を争った二人の女…年若い畝傍山の桜子と、年嵩で恋の勝利者になれなかった耳成山の桂子が、霊となった今も花枝で互いを打ち散らす『三山』。訴訟で都に行ったまま便りのない夫を恨み、音よ届けと砧（衣板）を打つ妻の淋しさを描く『砧』。小野小町に執心を残す深草少将が百夜通いを再現する『通小町』。若い日の驕慢の報いから、百歳の身をボロに包み物乞いしてさすらう小野小町を描く『卒都婆小町』。遠のいた光源氏の愛…その悲しみが恨みとなって源氏の妻葵上に祟る、六条御息所の生霊の能『葵上』。甲斐七面山の池の竜女が出現し成仏を願う『現在七面』。頼朝に疎まれて都落ちする義経主従の苦難を描く『安宅』『船弁慶』。菊の露を飲んで神仙となり永遠の若さを得た少年の能『菊慈童』。天から鼓を授かった少年の物語『天鼓』。それぞれ個性的な魅力にあふれた男女が、四番目物には登場します。

なお、四番目物には『隅田川』『安宅』などのように、主要な登場人物がほとんど現実の人間で、筋が時の経過とともに展開する、といった様式の能が多く含まれています。現在と過去が交錯する夢幻能に対応するので、現在能とよんでいます。

鬼

主人公たちの運命を、どきどきはらはらと見守るといった、四番目物能のあとに位置するのが、良きにつけ悪しきにつけ、とうてい人間業とは思えない霊力を発揮する鬼や獣の精などが現れて活躍する能です。

一週間しかない桜の花の寿命を三週間に延ばそうとして天界から神がやって来る『泰山府君』。山の鬼であ

る山姥の舞を真似て舞い、都で評判の遊女。その遊女の前に古怪な姿を現した本物の山姥が、山また山を飛ぶように巡って消えて行く『山姥』。菅原道真の怨霊が雷となって宮中を暴れ回る『雷電』。国家公務員（科挙）の登用試験に落第して自死した鍾馗の霊が、鬼神となって国を守る『鍾馗』。美女に化けて国を滅ぼそうとした九尾の狐が妖しい姿をみせる『殺生石』。

これらを一括して鬼畜物とよびます。式能では五番目物、あるいは一日の最後の能になるので切能ともよびます。区切りのキリです。一日お疲れさま、にぎやかで楽しい能をみて、気分よくお帰り下さい、そしてまたお目にかかりましょう、と舞台から客席にエールを送るのが、切能の役目の一つでしょう。

酒好きの妖精猩々が、親孝行な男に汲めども尽きぬ酒壺を与え、富貴繁盛を約束する『猩々』（『猩々乱』）。霊獣獅子が牡丹に戯れ遊ぶ華麗な『石橋』。こうした祝言色の強い能も切能の仲間です。

新作能　五番立からははずれますが、新作能などに少し触れます。伝統的な能を演じるだけでなく、近年は新作や、埋もれた能を再生する試みが、能を活性化する動きとして注目されています。新作能には『鶴』『かぐや姫』『老椿』のようにストーリー性より舞を重視した、能舞とよびたい作品や、外国の詩を翻案した『女と影』などがあり、再生した能では沙漠の王深沙大王が現れる『大般若』、水を司どる竜女が人間と結婚し人々を守る『渇水竜女』、山幸彦と結婚した竜王の娘豊玉姫が潮満玉、潮干玉の神話を再現する『鵜羽』などがあります。

台本や演出が次第に変化した『葵上』『弱法師』といった伝統的な作品を、昔の台本と演出で演じてみるといった機運も高まっています。伝統を重んじる能の世界にも、新風が吹いています。

能舞台――花に遊ぶ場　本舞台・橋がかり・楽屋

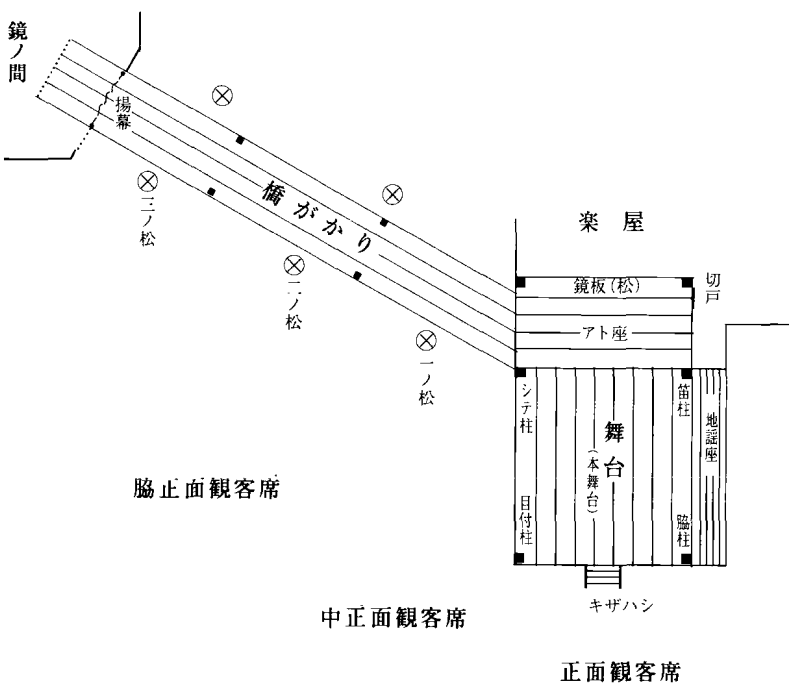
能は、普通、能舞台とよぶ専用の舞台で演じます。その能舞台は、大きく分けて三つの部分――演技のほとんどを行う本舞台、役者たちが支度をする楽屋、本舞台と楽屋をつなぐ橋がかり――で成り立っています。観阿弥・世阿弥の時代から、基本的な構造は変わらないようですが、本舞台を中心にして、橋がかりや楽屋の位置は試行錯誤があり、現在のような形に定まったのは江戸時代のごく初期といわれます。能舞台と観客席とを一緒に収めた建物を、能楽堂とよんでいます。能楽堂に入ると、屋根のついた能舞台の威容にま

ず目を奪われます。と同時に、なぜ屋内の舞台に屋根があるのかと不思議に思う人もあるでしょう。かつて能舞台は、白い砂や小石を敷きつめた白州という空間をはさんで観客の居る建物と向き合う、独立した建物でした。能楽堂は、その遺風を残しているのです。7頁写真、12頁図を参照。

能舞台は、本舞台に付属するキザハシ（梯子。ほとんど装飾に近いものです）のある方を正面とします。本舞台は三方が吹き抜けで、客席の中に突き出しており、この構造が、能舞台を大変立体感のあるものにしています。本舞台と橋がかりで作る舞台空間は、そっけないくらい簡素ですが、これが独特の緊張感を生んでいます。こうした特性を生かして、能は演出などにさまざまな工夫を重ねて来ました。舞台の簡素にみあうよう、背景の作り物や小道具は最少必要なものだけにとどめ、多くを観客の想像力にゆだねてしまう。鋭く研ぎ澄ました、無駄をできる限り省いた演技で、ずばりと主題に切り込むといった能の手法は、舞台空間の特殊性と切り離すことはできないでしょう。

本舞台うしろに囃子方の並ぶアト座があります。その奥の、松が描かれている鏡板に向かって左の方に伸びるのが橋がかりです。役に扮した演者や、楽器の奏者たちが登退場する通路ですが、演技空間としても上手に使われます。ちなみに太い四本の柱で囲まれた本

能舞台図



舞台は京間三間（約六メートル）四方が一応決まった寸法ですが、橋がかりの長さについては、特に決まりはないようです。厳格な一方で、その場その場にあわせて案外平気なのも、能の面白さでしょう。全国的な広がりをみせる薪能。その薪能に代表される野外や、小劇場のフリースペース、美術館のロビーなどを上手に生かして演じるなど、異空間をさほど気にしない能の自由さに一脈通じます。

役者――花の具現者　たちシテ方・ワキ方・囃子方・狂言方

能の役者は役割の分担によって、シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方に大別されます。

シテ方

役者の中核をなすのがシテ方です。能の主役（シテとよびます）や、ツレ（連）あるいはトモ（供）とよぶシテの従者のような役を演じるほか、地謡あるいは後見などを担当します。シテ方の一人一人が、ある時はシテ、ある時は地謡というように、何役も兼ねます。地謡は能の中で、シテの気持ちを時に代弁したり、場面の情景を描写したりする役目を持ち、ふつう八人で編成されます。いわばコーラスです。後見は、舞台上のシテの演技が滞らないよう、目配り、気配りをしたり、楽屋では衣装（装束）を着付けたりします。

橋がかりの奥にみえる五色の揚幕。客席と楽屋との接点ですが、揚幕のすぐ内側は鏡の間といって、大きな姿見が置いてあり、扮装をした主役が、最後に能面をつけて静かに出を待つ場です。

能は、一見とりすまして分かりづらい面のあることは確かです。しかし、いわば能の思想といったものが分かれば分かるほど、能の懐の深さに気づき、そこに遊ぶ面白さの幅も、格段に広がります。

なお、能の登場人物には『船弁慶』の源義経のように、大人の役を少年または少女が演じることがあります。子方とよびます。子方には、当然子供の役もあるのですが、シテ方の多くは、子方を演じながら役者としてのステップを踏んで行きます。

ワキ（脇）方

文字どおり能の中で脇役的な働きをします。旅の僧、神主などに扮し、シテの登場を促す役まわりです。シテは亡霊や化身など、この世の者ではない人物も多いのですが、ワキは現実の人間、それも男性に限られています。能は仮面劇といいますが、ワキは面を着けません。

ついでに、能面をつける役はほとんどシテ方です。女性のシテは、現実の人間も亡霊もともに面を着ける

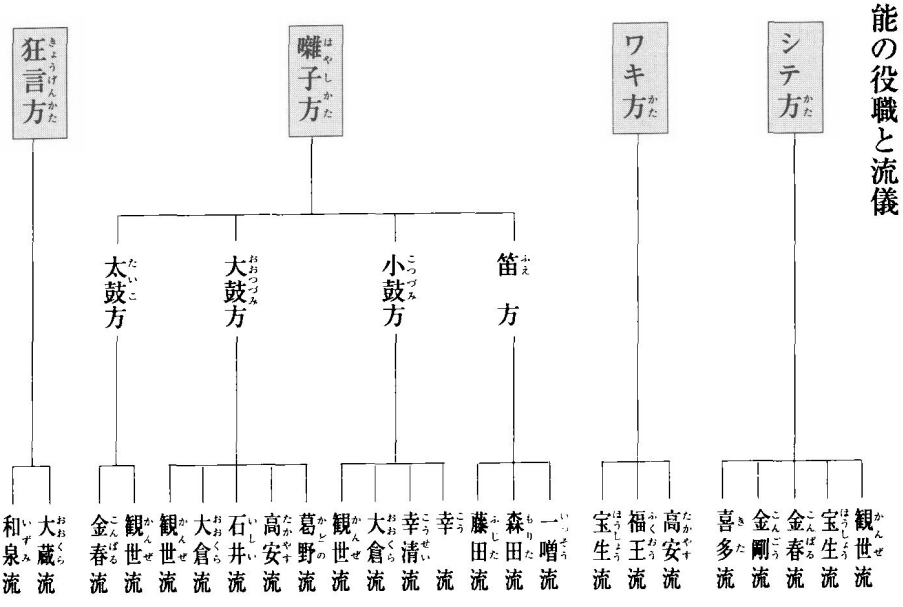
のが原則です。ツレも同じです。ところが男性のシテは、亡霊などには面を着けますが、現実の人間の時は素面（ヒタ面とよんでいます）で登場します。亡霊でもツレは面を着けていません。子方は、女の役でも面はつけないなど、一定の法則に拠っています。

囃子方

音楽劇である能の、オーケストラを担当するのが囃子方で笛、小鼓、大鼓、太鼓方の別があります。オーケストラといっても、各楽器一人ずつ。太鼓の出演しない能もあり、編成はシンプルです。

囃子方も、地謡と同じようにシテの心情や情景描写をするのですが、とりわけシテの舞踊的な所作には、重要な役割を担います。例えば序ノ舞、中ノ舞、急ノ舞という舞の音楽があります。この三つの舞は、基本的に楽譜は同じです。しかし、ゆっくり、ふつう、早いというそれぞれのテンポの違いによって、別の音楽のように聞こえます。更に言えば、同じ序ノ舞でも、各作品のシテの性格――それは作品情趣にもつながりますが――の違いによって、心持ちが微妙に変化し、全く別の音楽になります。時に強く、時にやさしく……千変万化する能の音楽には、楽器編成のシンプルさにくらべ不思議なほど豊かな広がりがあり、魂をゆすぶる魅力にあふれています。なお、太鼓が演奏に加わるのは、シテが天女や動植物の精など、人間でない場合が多いようです。

能の役職と流儀



狂言方

観阿弥、世阿弥の時代から、能とは兄弟のように一緒の舞台で演じられて来たのが狂言です。能が貴族趣味に傾き、雅びを目指して行ったのに比べると、狂言はするどい風刺精神を発揮するといったように、硬質な肌ざわりを持っています。登場人物もほとんどが現実の人間で、太郎冠者に代表されるごく普通の人々が多く、生き生きと生活感にあふれた姿をみせてくれます。舞台に緊張感の漂う能と、伸び伸びと開放感のある狂言。まったく異なる芸質の能と狂言は、交互に同じ舞台で演じられることによって、それぞれの美点を引き立てあって来たといえます。

狂言を演じるのが狂言方です。一方、狂言方は、所の男とか、寺男といった役で、能の中の人物としても登場します。いわば場面のつなぎ役を演じるのですが、これを間狂言とよんでいます。『翁』で三番叟を担当するのも、狂言方としての大事な役目になっています。

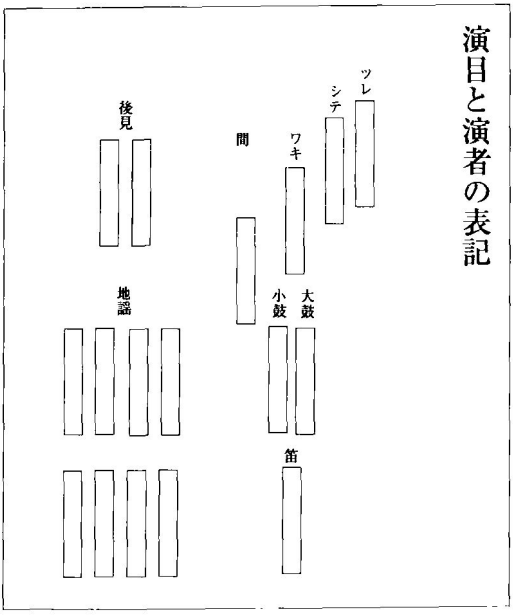
「松風」に学ぶ——花の装い

シテ、ワキ、アイ（間）は、能の中でさまざまな役に扮します。扮装の基本は、その人物らしく見えるようにということで、役柄によって類型化されています。江戸時代に整理された扮装の目安を装束（衣装）付といい、今日にもほぼ踏襲されています。シテ方観世流の装束付を参考に、「松風」を鑑賞してみましょう。

「松風」は、秋の月が輝く夜に須磨の浦に現れた、松風、村雨という汐汲みの姉妹の霊が、この里に侘住まいした在原行平に愛された昔を旅の僧に語り、今も行平を恋い慕う風情をみせます。詩情をたたえた、美しく格調高い鬘物の名作です。各役の扮装は、おおよそ次のようになっています。

シテ　松風＝面—若女　着付—摺箔　紅入縫箔腰

演目と演者の表記



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com